特集

通学合宿

★40人の子どもたちの八日間の物語

宿泊生活体験を通じて子どもの自立心を養おうと

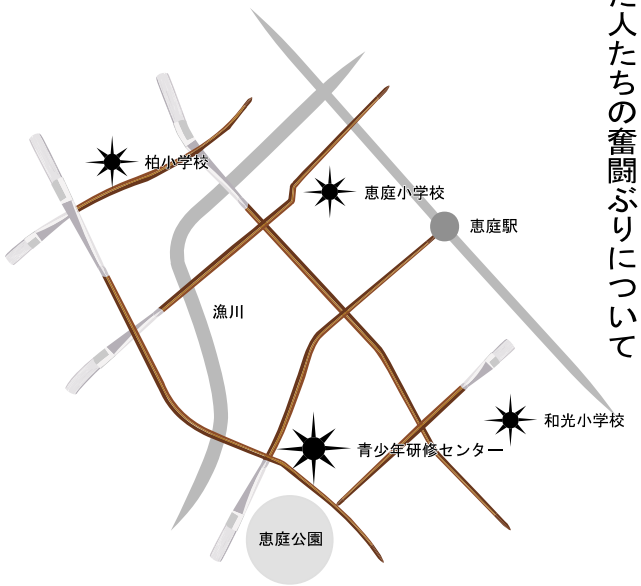
始まった『えにわ通学合宿』。
7月2日から、青少年研修センターを合宿所に、
7泊8日の日程で行われた。
参加したのは40人の子どもたち。
食事の用意、後かたづけ、洗濯などの日常生活は
子どもたち自身でしなければならない。
それを、地域の人やボランティアがサポートした。
今月の特集は、8日間にわたる子どもたち、
そして支えてきた人たちの奮闘ぶりについて
レポートします。

7月2日午後4時30分過ぎ、大きな荷物を抱えた親子が大勢、駒場町にある青少年研修センターに集まってきました。これから8日間にわたり行われる『えにわ通学合宿』に参加する人たちです。

でも、実際に合宿するのは子どもたちだけ。オリエンテーションのあと、お父さん、お母さんは、子どもたちとしばしのお別れです。

通学合宿とは、子どもたちが共に生活することで自立心を育てようという取り組み。恵庭市では昨年7月、市民が集まり実行委員会を組織し行ったのが初めてでした。その時参加したのは、恵庭小学校の4年生13人。

そして、今年に入り『通学合宿フォーラム』を開催するなどの取り組みを



重ねながら、2回目の通学合宿につなげていきました。

今年参加してくれたのは、恵庭小学校、和光小学校、柏小学校の3校から4年生以上の児童40人。ここから学校へも通います。食事やお風呂もここで済ませます。日常生活の場が、家庭から青少年研修センターに変わったということです。

でも、家庭環境とは全く異なります。知らない人との共同生活ということ。生活のために必要なことのすべてを自分たちで決め、自ら動かなければ、何も実現しないということ。

これは大人でも、ちょっと二の足を踏んでしまうような環境ですね。

これまで、子どもたちの身の回りの世話は、家の人がしていたでしょう。でも、ここではそれが通用しません。食事一つをとってもそうです。

子どもたちは、予算の範囲内で40人分を賄える献立を考えるところから始まり、買い物、調理、後かたづけまでします。掃除や洗濯だって、自分でしなければ誰もしてくれません。

経験の少ない子どもたちに、そんなの無理、って思いませんか。でも、大人がすぐに手を貸してしまっては、通学合宿の意味は半減してしまいます。ここは、大人もがまんのしどころ。

実行委員会が願っていたのは、通学合宿を通じて子どもたちに「自信」と「思いやり」、「協力する心」を育んでほしいということです。ですから、子どもたちが悩み考え始めたときに、初めて大人が手を差し伸べることにしました。それも、答えではなくアドバイスに留めました。後は、子どもたちが考え協力しあう中で、解決する力を付けていってほしいと願ったからです。

そうはいっても、さまざまな場面で子どもたちへのサポートは必要です。合宿所生活から始まり、学校への集団登下校時の引率など、人の手が必要なところはたくさんあります。

そこで力を貸してくれたのが、それぞれの小学校区の町内会やＰＴＡ、子どもの健全育成のための活動をする市民団体などです。高校生ボランティアも参加してくれました。

しかし、子どもたちと生活を共にすることは、ボランティアの人たちにとっても想像以上に苦労の多い体験だったようです。そしてこの経験は、自分たちにとっても、得るところがたくさんあったと口を揃えます。

子どもたちは、親元に戻っていきました。親からは、進んで手伝ってくれるようになった、という声も聞きます。でも、こうした変化だけではなく、この体験が、これから子どもたちが力強く生きていくための力になってほしいと、実行委員会では願っています。たとえ今は、子どもたちの心の中に、つらかった、という思い出だけが残っているとしてもです。

通学合宿3日目。日曜日となったこの日、小樽市にある「塩谷丸山」登山を実施。一人の脱落者もなく、みんなで頂上に集合し記念撮影。

通学合宿 八日間にわたる奮闘の記録

8日間、子どもたちはがんばり抜きました。
食事だって、買い物だって、掃除だって
自分たちでしました。
きっと、こんなにいっぱい仕事をした経験って、
なかったことでしょう。
そんな子どもたちのがんばりぶりを紹介します。
ご覧ください。

思い出写真館

買い物も自分たちでしなければならない。だから、必死でチラシとにらめっこ。40人分の食材、果たして、決められた予算の中でそろえること、できたのかな?

目にラップをまいた女の子。ふざけているのかと思ったら、玉ねぎを刻むと目が痛くなったので、やってみたとのこと。突拍子もないけれど、自分なりに工夫してみたのだろう。お母さん、毎日大変なんだ、っていう感想を話してくれました。

杉本　彩夏さん
恵庭小学校４年生

うちにはまだ、5カ月の弟がいるので、お母さんはその世話をしながらごはんを作らないといけないから大変なんだ。それで、私も料理ができるようになりたくて参加したの。大変だったのはタマネギを切ること。どうしても目が痛くて涙が止まらなかった。友だちは目にラップをしてみたけどダメだったみたい。でも頑張って作ったサラダはすごくおいしかったよ。この間、合宿で覚えた卵料理を家で作ったら、お父さんもお母さんもおいしいって言ってくれてうれしかった。もっと上手になりたいからまた行きたいな。

永井　雅人くん
恵庭小学校５年生

去年参加して、楽しかったから、今年は自分から行きたいって言ったんだ。今回は2つのグループでご飯を作ったよ。自分たちの班だけでなく、みんなで決めていくっていうところが難しかったけど、学校の家庭科では経験できないことだと思った。自由時間やお風呂の時、違う学校の人と話をしたり、高校生の人と相撲で遊んだりして楽しかったな。閉会式の時、200人以上の人が協力してくれたって聞いてみんなびっくりしていたんだ。来年もあったら、ぜったい参加するんだ。

ねえ、聞いて!
ボクたち、私たちが
考えたこと、感じたこと。

子どもたちのここでの生活は、結構ハードスケジュール。

まず、朝は6時までに起床。通学のために合宿所を出る時間が7時30分ころだから、この1時間30分の間に、着替えや洗顔、ラジオ体操に食事も済ませる。雨の日だって、ラジオ体操は中止にならない。だって、隣りは体育館だから。

食事当番に当たっている班は、みんながラジオ体操から帰ってくる7時ころまでに、食事の準備を済ませなければならない。朝食だから簡単なメニューだけど、それだって経験のない子どもたちにはとても大変なこと。

ゆっくり寝ていたいけど、そんなことしたら、朝食抜きで学校に行くはめに。

通学は、学校ごとに集団登校。町内会の人たちが引率してくれる。自分たちで作った旗を先頭に、みんなそろって登校。通学合宿に参加した子どもにとって、学校が一番楽だったかな？

学校から帰ると、夕食当番の班は大忙し。何たって、ボランティアの人たちを合わせると、60人分くらい作らなければならない。お母さん方に聞きながら作る。

夕食後はテレビでも見てゆっくりしたいだろうけど、途中からテレビも禁止。その変わり、ボランティアの人たちが、紙芝居や焼肉パーティーを開いてくれたこともあった。

こんなに大変な通学合宿。子どもたちは「もうイヤ！」って言うかと思ったら、機会があったらまた来たい、ですって。ヤワに見えて、結構たくましい子どもたちなんだ。

新　真由美さん
新岳樹くん（恵庭小学校4年生）のお母さん

去年、恵庭に引っ越してきました。通学合宿のことは広報誌で知り、まちの人たちが地域の協力を得ながら、こうした取り組みをしているなんておどろいたのと同時に、感心していたんです。だから学校から案内がきた時は、ぜひ息子を参加させたいって思いました。普段は、限られた人としか接することがないですし、悪いことをした時は、親以外の人にも叱られるという経験もしてほしかったんです。照れ屋で親から離れて何かをするという子ではないのですが、今回は参加すると言ってくれました。家では、つい手をかけ過ぎてしまうので、親にとっても、子離れするいいきっかけだったかもしれません。帰ってきてからは、返事がすぐに返ってくるし、手伝いもしてくれるようになりました。すごく積極的になり、びっくりするほど成長しました。参加させて本当に良かったです。回を重ねるごとに充実していくと思いますので、ぜひ続けてほしいですね。大勢の人の協力があったということも、息子の心の隅にでも、残っていってほしいですね。

有働　康佑くん
和光小学校6年生

同級生の友だちも参加すると思っていたんだけど、6年生は僕一人だった。一番年上だし、みんなを引っ張っていかないとっていう責任感が少し湧いてきた。掃除をしたり、ご飯を作ったり、いつもお母さんがしている仕事って、結構大変なんだって分かった。一番辛かったのが早起き。いつも、起こしてもらっているから、一人で起きるのは大変だったなぁ。3日くらいならもう一度参加してもいいけど、8日間は長くて、途中で家が恋しくなっちゃった。でも最後まで頑張ってよかった。

お母さんに“お母さんのいない生活をしてみない？”っ言われて、挑戦してみることにしたんだ。8日間は長いかなぁと思っていたけど、あっという間に終わったよ。ウノやトランプでみんなで遊んだのが一番楽しかったな。買い物やご飯の準備も楽しくできたよ。でも、洗濯や掃除はちょっと難しかった。帰ってからは、自分から、手伝うことない、って声をかけるようになったし、食べ終わった茶碗も片づけるようになったよ。また、あったら行きたいな。

茎津　圭佑くん
柏小学校4年生

通学合宿を主催した実行委員会、それをサポートした町内会やボランティアの人たち。通学合宿が終わった今、この取り組みをどう評価しているのでしょうか。５人に登場していただき、お話しを伺いました。なかには、子どもやその親たちに向けた、少し辛口の意見もあるようです。

五十嵐　務さん

えにわ通学合宿実行委員長

今回は、人数も学校も増やし、同時に日数も長くしました。昨年の２泊３日から今年は７泊８日です。その分、ボランティアの人たちは、大変な苦労をされたと思います。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

この８日間という長丁場は、子どもたちにとっても、つらかったでしょうね。でも私たちは、この長さが通学合宿にとって意味のあることだと思っています。

ここでの基本は、自分たちのことは自分たちでやるということです。

例えば食事の準備に手間取ると、自由時間に食い込んでしまいます。そこで子どもたちは早くできる方法を考え工夫します。そのうち、協力し合うということを身につけていきます。それも、個性に合わせて、仕事を分担していくと効率的だということを、体験から学んでいきます。ときには意見の食い違いから、思い通りにならないことだってあったでしょう、こうした経験が子どもたちには必要なんだと思います。子どもたちが、ほかの子とこういう関係を築くまでには、やはりある程度の日数が必要なんです。

最後の日、迎えにきた保護者に向けて私はこう言いました。子どもたちを見るということは、その家庭を見ることだって。正直、子どものしつけに、首を傾げるような場面も目にしました。しつけは、家庭で教えるのが基本だと思います。家庭でしなければいけないことは家庭でやり、そして地域の人たちは、そんな子どもたちにもっと関心をもっていく、それが地域と子どもの理想の関係なんだと思います。その意味からも、今回、さまざまな人がボランティアとして関わってくれたことも、とてもよかったことだと思っています。

藤田　久子さん

生活学校恵庭くらしのサロン「淡」代表

私たちの担当は、食事などのお手伝いでした。料理経験のない子がほとんどだったので、始めは時間もかかり大変でしたね。ラーメン一つ作るにしても、50人分ともなると鍋の大きさや手順を考えないとうまくできません。どうやったらスムーズにできるのか、ヒントを与えながら考えさせました。でも、子どもたちの発想は大人が思いもしないような具を考えついたり、おもしろいですね。

意外だったのが、料理や後片づけに関しては、男の子の方が積極的だったということです。

今の子どもたちは、何でもそろっているのが当たり前という環境で育っていますが、させてみると、自分で考え、できるようになるんです。つい親が手を出してしまいがちですが、そんな子どもたちの姿を見ていると、私たちの方が考えさせられました。子どもたちの笑顔を見て、この合宿をして良かったと思います。

平尾　満利さん

恵庭地区
町内会連合会副会長
（福住町3丁目町内会長）

町内会の恵庭地区連合会からは毎日４人、ボランティアとして参加しました。子どもたちの登下校時の付き添いが主な担当でしたが、子どもたちの歩く速さに驚きました。途中でトイレに行きたくなった子どもがいたので、次回からは通学路付近の店舗や事務所にあらかじめ協力をお願いしてみてはどうでしょう。先日、参加した子どもの家の人から、朝一人で起きてくるようになった、と聞きました。家庭生活に変化があった子もいるようです。今の子どもたちは、何事も積極的な反面、自分中心の行動をとってしまいがちです。通学合宿は、そんな子どもたちの生活力を養う絶好の機会だと思います。これからも続けて欲しいですね。

私は通学合宿をこう見る

安部　英志さん

青少年研修センター
社会教育主事

昔は、近所の子どもたちが集まった中で、いろいろなことを覚えたものです。でも、塾やスポーツに追われる今の子どもに、そんな余裕なんてないでしょうね。家にいても親の手伝いなどをしたことない子が、たくさんいると思います。

基本的な生活習慣が未熟な子どもたちが集まり、共同生活を8日間も送るわけですから、本当に我慢の連続だったと思います。

でも、うれしい誤算もいくつかありました。

その一つは高校生ボランティアの活躍です。樋口さんをはじめとする高校生たちが、本当に一生懸命サポートしてあげていました。子どもたちは、どんなにか勇気づけられたことでしょう。

もうひとつはリタイアする子が一人も出なかったことです。けがや病気も心配ごとの一つでしたが、共同生活になじめない子が必ず出てくるだろうと覚悟していたので、無事、40人全員を見送ることができたときには本当にうれしかったですね。

合宿前の説明会の時、子どもたちの心の中に自立心やしつけの種をまきます、と家族の人たちにお話ししました。

8日間の合宿期間は、子どもの成長過程のほんの短い時間です。ですから、この8日間の体験によって、子どもが急に成長するということを期待しないでほしいんです。ここで体験し学んだことは、きっと子どもたちの記憶の中に残っていくと思います。合宿で培った生活力が育っていくように、家族の人たちも応援してあげて欲しいですね。

樋口　春菜さん

恵庭南高校2年生
ボランティア部所属
（北広島市在住）

通学合宿の話は顧問の先生から聞き、ぜひ参加したいと思ったんです。でも、ちょうどその時期は文化祭の準備の真っ最中で、ボランティア部員だけ抜けるということは、難しい状況でした。それでもどうしても参加したくて、先生に無理を言って私だけ許可をもらったんです。楽しみだった反面、うまくサポートできるか不安でしたね。

学校に通いながら、子どもたちと一緒に寝泊まりして、食事や入浴、洗濯の手伝いなど、生活全般のサポートでしたから、目が回るほど忙しい毎日でした。でも後半は、顧問の先生から話しを聞いた他のボランティア部員も応援に駆けつけてくれたんです。

来てくれた仲間も、掃除のやり方からゲームの相手まで、何でも子どもたちと一緒に取り組んでいました。

子どもたちの相談にのったり、身のまわりの世話をしてあげたりすることで、私自身も集団の中で学ぶことの大切さを痛感しました。

通学合宿での経験は、普段のクラブ活動では得られない貴重な経験です。今後もチャンスがあれば、また参加したいですね。

ー通学合宿を支えてくれた人たちー

（順不同）

- ■恵庭市町内会連合会和光地区・恵庭地区・柏地区
- ■恵庭小学校 PTA・柏小学校 PTA・和光小学校 PTA
- ■柏小学校おやじの会
- ■恵庭中学校おやじの会
- ■恵庭市校長会
- ■恵庭市教頭会
- ■生活学校恵庭くらしのサロン「淡」
- ■恵庭まちづくり市民の会
- ■恵庭北高校ボランティア部
- ■恵庭南高校ボランティア部
- ■恵庭市子ども会育成連合会
- ■青少年健全育成を考える五人の会
- ■恵庭市老人クラブ連合会
- ■一般市民のボランティアのみなさん

※この他、企業や事業所、商店など多くのみなさんから、食材や飲み物、入浴券など、ご協力いただきました。